

走れ思い出

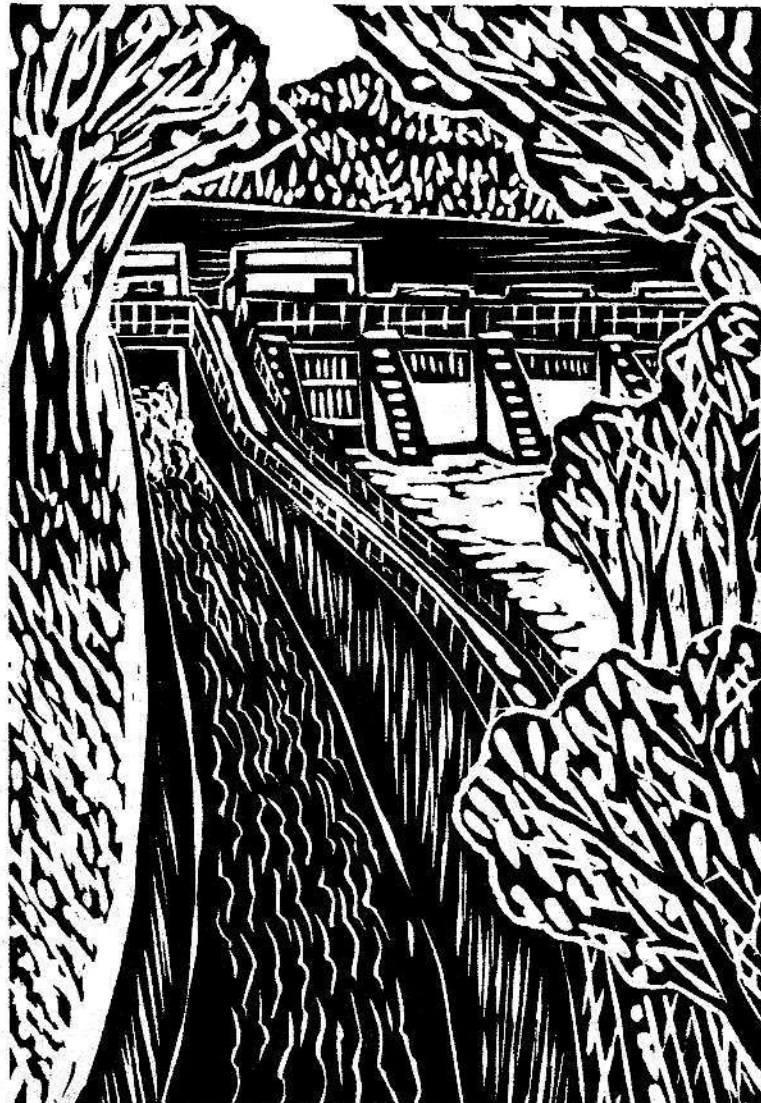
山線軌道

> 8 <

滝の上や水たまりは、雪が多くて五月にならなければ線路が全部凍り出します。無料で列車に乗ります。盆や祭り、苫小牧にいい映画がかかったなどという時に一人の同僚と三人で、分岐から第四発電所へ向かって歩いていたので、すると

笏湖の操車係、その後車掌をやりました。列車に乗って、笏湖の上をさしかかると、大きなクワの木に登った子供たちが列車に手をふります。私が子供の頃もそうでしたが、山線というのは文明の象徴とでもいうのでしょうか、列車が来たというだけでうれしかったのです。

列車は文明の象徴



版画・能登正智さん(苫小牧市糸井389ノ9)一滝ノ上

ん。それで人々が総出で雪かきをし、少しでも早く列車を通そうとしました。

子供のころ、山線に乗ったのは月に三度くらいだったでしょうか。山線従業員の家庭では四角い木札のバ

は、父母らに連れられて見に行きました。昭和十四年に、私も山線

第四発電所の近くで子グマの姿を見ました。それで口

主任さんは腰を抜かして動けない。クマの方が逃げて

湖畔で操車係をしていた時には、ちょっとした事件

が、その前一年間は測量の仕事などを手伝っていました。ある時、主任さんとう

滝ノ上手を振る子供たち

マは、母も大きな親グマ

山線に入り、駅員から支

湖へ来られました。湖畔に

は列車の方向を変えるた

め、線路を三角に敷いた引

き込み線があり、ここには

客車を二台以上入れられな

かったのですが、上部から

の命令で、居室のお乗りこ

なった貴賓車をどうしても

入れるという。それで入れ

ると、貴賓車の屋根の角が

ぶつかり合っでこわれてし

まった。無理を言ったわけ

について、後で「どうも引

き込み線のむこうにあった

お宿用を足されるためだ

ったのでは」となどと話さ

れました。

それと、戦時中のことで

すが、屋すきに苫小牧を出

た列車が米軍機に追いか

られ、四つ付近から六つ付

近まで逃げ、林の中に車両

を隠し、難をのがれたとい

うこともありましたが、思

い出は語り尽くせないほど

です。

苫小牧市小糸井町一ノ七

八木 政雄さん六〇談

メモ

「山の子供」

明治四十五

年一月十四日、第二発電

所で生まれた畔柳二美

(昭和二十九年「姉妹」

で第八回毎日文化賞受

賞)は自伝的小説「山の

子供」に、山線について

「社宅の前の切れたとこ

ろから二本のレールが一

路一敷かれてあった。町

へ続く唯一の道であっ

た。この汽車は、雪が降

ると冬中は姿を見せず、

夏場も、時折、思い出し

たように突然「ポー」と

訪れる程度であった」と

記している。